

## 英語の夢と記憶

### — キャロル・バーネットとロバート・ワレンの場合 —

長崎 紘明

フロイト<sup>1)</sup>は夢分析において性的な意義を重視した。性的な意識が夢の検閲を経て、夢の物語になることを示した。しかしユング<sup>2)</sup>は性的な意義では夢を説明するためには不十分であると考えた。ユングは満たされない願望が人間性として、意識を構成する材料になると説明した。とくに意識の中心として神的な意識を重視して、それを映像化しようと試みた。

この項では夢の材料を説明するためにオリジナルな方法を適用した。我々は記憶分析を重視し、夢の素材となる過去の出来事がどのように現在の意識として再生されるかをキャロル・バーネットの自伝<sup>3)</sup>とロバート・ワレンの“マディソン郡の橋”<sup>4)</sup>の中から適確な実例を紹介する。

キーワード：夢の材料・夢の検閲・回想・神意識

#### I. 夢の検閲

フロイトは“夢の表現様式”には人類の進化の影響があると考えた。人類の進化といっても、“言語の進化”である。言語は源に遡れば、素朴な原始生活に必要な事物や習慣などの指示語とか、労働や行為にともなう動詞や、祈りの文句などであろう。言語の進化は現代に至るまで続いている。現代の日本語や英語の表現でも、昔は使われなかった言葉が随所に使われている。とくに“表現様式”は変化している。たとえば疑問形で肯定と疑問が同時に表現されたり、疑問形で否定と疑問が両方に使われたりする。実例を新聞記事から引用すると——語尾をちょっと上げた疑問口調の言い方で、聞き手に“暗黙の同意”を求めながら、“今年の就職はどしゃぶり？ どころじゃなくて氷河期？”——表現様式が省略され、圧縮されている。従来の会話ならば、“今年の就職状況は悪くて、天候に例えれば、どしゃぶりの悪天候のようである。あるいはもっと悪くて史上最悪の氷河期といってもおかしくない状況です。”このように言語の表現方法は現代でも進化しつつある。

フロイトが発見した“夢の表現様式”における言語の原始的な性質というのは、

- (1) 比喩的な表現→代理、移動、置き換え
- (2) 象徴的な表現→視覚像へ変化
- (3) 幼児的な表現→願望、不安の直接的反映である。

たとえば“火”は激しい感情、嫉妬の感情が比喩されている。“美しい風景”は安らぎや自由の感情が象徴されている。家、器、大地は女性的なもの、母、女、女性器などを象徴する。口を塞がれる＝障害、を比喩する。このような比喩的な表現形は、意識の中に抑制されている願望や不安などを反映しているという。

もう一つフロイトが発見したことは“夢の検閲”であ

る。夢の検閲というのは、夢のストーリーで

- (1) 事実や人物が脱落したり代理人に置きかわれるのは、性的要素や罪の意識と関連している。
- (2) 事実や人物が編成がえされたり、因果関係が逆転したりするのは、検閲後の編集である。

ふつう、幼児期の記憶は、成長する過程で、さまざまに処理されたり、消去される。そのような記憶はマスクされた記憶として、残っている。このような記憶が夢になるときは、検閲の対象になっている。成長によって、自然に忘れられている記憶を再生するときに、部分的に省略されたり、飛躍したり、時間軸が前後したり、人物像が重なったりすることがおきる。

これは現代流に言い換えると、記憶の再生メカニズムの問題である。記憶の再生、あるいは回想においては、記憶の一部分が脱落していたり、どうしても思い出せなかったりする。表現するときに、全体を圧縮して短時間につなぎ合わせる。

#### II. 記憶の回想と夢の類似

記憶の再生や回想の時に、どのような意識があるか？

キャロル・バーネットが最も古い記憶を次のように回想する。

My earliest memories are of being bathed in the kitchen sink. ... I remember her drying me, holding me, kissing me, and putting me to bed.

I hated being separated from her. I was her little shadow, and that was just the way I wanted it.

Goggy was two hundred years old ... and she wouldn't do anything on Sunday but read the Bible. She wouldn't even talk.

(私の最も古い記憶は、台所の流しで体を洗ってもらったこと……それから体をふかれて、抱かれて、キスされて、ベッドに寝かされた。祖母から離れるのが嫌だった。私は祖母の小さい影のようだったし、それが私の望みだった。祖母は200才……日曜日に何もしないで聖書を読んでいた、口もきかなかった。)

\*山梨県中巨摩郡玉穂町山梨医科大学生理学講座第2教室  
(受付：1994年9月2日)

4才の時の鮮明な記憶の回想である。実際に祖母の年齢は50才位だったが、子供心には200才位に思えたし、その祖母の分身のようだった自分を回想して、子供の願望がストレートに表現されている。これは、回想であるが、そのまま夢の表現様式になっている。

I'm lying on the grass, looking at the sky and making up pictures with the clouds. ...I'm four. It's very still, and the clouds have stopped moving. For a time there, I was everything and everything was me. I've never felt that way since.

(私は芝生の上に寝ころんで、空を見ながら雲の作る絵を眺めていた。……私は4才だった。しんと静まりかえった一瞬、雲が動かなくなった時、私は全て満たされたような、全ての物が私に入ってきたように感じた。そんな感じは、かつてない経験だった。)

この回想も幼児体験であるが、一次感覚で雲の作る絵が変わりゆくのを眺めているうちに、一瞬、神秘的気分になっている。風景と一体感を味わっている。この例も、そのまま夢の表現としてもおかしくない。

キャロル・バーネットの幼児体験の回想はどちらの例も、現在の自分の中の感覚と一致している。幼児期の感覚(たとえば祖母の影のように一体感をもっていること、雲を見ているうちに、雲と風景と一体化したこと)が、現在も同じように感じられる。これらの2例は、フロイトの“幼児期が夢の中に再生される”という発見の証拠となる。多分、この回想のような記憶が、映像として再生されたものが、夢の表現様式となるであろう。回想ではあるけれども、時制は現在形と変わらないような意識である。フロイトによれば、何らかの理由で消去されなかった記憶である。

少し長い引用になるが、キャロル・バーネットが俳優の卵の頃、売れない友人たちと売り込みのためのショーを企画した。その当時の回想である。これに失敗したら、キャロルたちは、ショービジネスの世界で生きてゆくことをあきらめねばならぬ程、お金もなく働き口もなかった時のことである。

"Five minutes, everybody, five minutes oh God, oh God, oh God, please don't let me forget anything. Oh, God... It was here March 3, 1955, our opening night. We could hear them coming into the hall... They got our postcards and come! ...I peeked through the curtain. They looked like agents..."

(5分前だよ。みんな。5分前だよ。神様、ああ神様、神様。どうか私が何も忘れないようにお願いします。ああ神様……。1955年3月、それは私達のショーの初日であった。私達は観客がホールに集まっている音を聞いていた……観客は招待状を見て来てくれた!……私はカーテンから客席をのぞいて見た。観客は、ショービジネス

の代理人のように見えた……)

I am going to sing "monotonous" the Eartha Kitt number from New Faces. It was a sexy, funny number, and Kitt had been very funny in it when she introduced it on Broadway in 1952...The New York audience was familiar with the song and began to laugh at the piano intro. I walked out onto the stage. I was in a frumpy old print house-dress.

(……私はエルサ・キットのナンバーからニューフェイスを音痴で歌おうとしていた。1952年にブロード・ウェイでエルサ・キットが歌った時は、大変魅力的だった。……ニューヨークの観客はそれを良く知っていたので、ピアノのイントロにあわせて私が流行おくれの普段着姿で舞台に出ると、すぐ笑い始めた。)

キャロルにとって絶体絶命の人生の岐路はかくして成功し、ショービジネス界の人気者になった。その時の事を、キャロルは昨日のように回想している。その時の舞台での緊張感は、現在のキャロルの意識にはっきりと記憶されているようだ。その舞台と現在の自分を一体のものとして表現している。

### III. 夢による予知

キャロルの父が亡くなる直前に、キャロルの母が夢の中で名を呼ばれて、死を予感する時の話を引用する。この時の母の話はキャロルにとって一生で一番、印象深い会話だという。

"Did I tell you your father appeared to me in a vision in the middle of the night?"

"The night he died? Tell me about it."

"It was a domndest thing. I was right there in the bed, and out of the blue I could hear Jody, calling to me."

"Lou, Lou" and next thing I knew, I could actually see him. He was lying on a cot somewhere, and he was trying to get through to me. That was three years ago. and I remember it as if it was yesterday."

"Well, I got right up out of that bed and started phoning all over town to track him down. I knew he was trying to reach me. My intuition never fails me, you know that, and this was a godemn vision. I got hold of a few of his old cronies and finally found out. He was in some dump in Venice Beach. I woke up Christine, and we got dressed and took the streetcar and the bus clear out there.

It was near damn where we found him. It wasn't easy, believe you me, but found him. He still had TB ...plus pneumonia...Christ."

"お父さんが真夜中に夢に現われた話をしたかな?"

"お父さんが亡くなった夜のこと? 話してよ。その時のこと"

“あの時は最悪だった。ベッドの中で突然、ジョディって、呼ぶのよ、お父さんが。ロウ？ ロウなの！ って答えたなら、ロウの姿が見えたのよ。どこかのベッドに寝ているようだった。それで私の方に来ようとしていた。3年前のことだけど、昨日のようにはっきり憶えている”

“それから私は起きて、ロウが居そうな所に電話をかけまくった。ロウが私を呼んでいるにちがいないと思ったのよ。私の勘は当たるの。最悪の場面のような、何か決定的に悪くなった予感がしたのよ。ロウの古い友達に2、3人電話して、見つけたわよ。ロウはベニスビーチのサナトリウムに放りこまれてたのよ。私はクリスチンを起こして、洋服を着て、タクシーとバスでロウの居る所へ行った。もう最後に近いという感じだった。もう駄目だった。でも、間に合った。結核と肺炎で…神様！”

キャロルの母が別居中で住居もはっきりわからないような夫の危篤を夢で知って(？)、捜し出す。知人の死を夢で告げられたという例は沢山ある。これもその例である。夢の予知的な性格については、ユングが相当の努力を傾け、人間の精神の中にある神的な要素との関係を追及した。ユングはそのような精神の神的な要素を映像として描こうと努力した。自分の夢の映像を沢山残している。夢の映像は、時には精神の神的な面の映像を表現しているにちがいないと考えた。信仰が日常的な人々にとっては、精神の神的な部分というのは確かに存在している。そのような自分の精神の一部分を描こうという努力は、科学的な努力と芸術的な努力とを合わせたような、夢の研究であった。ユングが特に気にしていたのは、自分の内面にある潜在的な願望、あるいは変身願望を、文字と絵で表現した作品であった。ユングはヘーゲルの影響が大きい。ヘーゲルが“意識の内容”と定義しているものを、ユングは“無意識の自己”と定義して、それが神的なものを核にしていると考えていたようだ。

折り合いの悪い別居中の夫は、すでに他人である。その人を夢で見て、“あの人が呼んでいる”と幻覚を感じて、その人の危篤状態のベッドを捜し出すというキャロルの母の行動は、人間の神的な行動の1つであろう。夢分析の基本的要素として、人間の性的な面を重視したフロイトに対して、ユングは人間の神的な面を重視した。とくに“母性”の神的な要素を重視した。

#### IV. 神的な回想

“マディソン郡の橋”でフランチェスカと恋人のロバートが生き別れる場面は感動的である。夫のリチャードの車に乗っていて前を走る恋人ロバートのトラックを見つけた。

Since Robert Kincaid had driven away from her last Friday, she realized, in spite of how much she thought she'd care for him then, she had nonetheless badly underestimated her feelings, That didn't seem possible, but it was true. She had begun to understand

what he already understood.

(先週の金曜日にロバート・キンケイドが去ってから、彼女はロバートを想う気持を無視していたが、気にかかってしかたがなかった。自分の感情は思っていたよりも深いものだ実感していた。彼女には、できそうになり出来事だったけれど、それは実際にあった出来事だった。彼女はロバートが全てを見通していたことが、わかりかけていた。)

But she sat frozen by her responsibilities, staring at that back window harder than she had ever looked at anything in her life. His left signal light came on. In a moment he'd be gone. Richard was fiddling with Ford's radio.

(しかし彼女は凍てついたように坐っていた。前の車のウィンドウを見つめることは、人生でかつてない程、辛い事だった。ロバートは左折のシグナルを出した。間もなく彼は行ってしまふ。夫のリチャードはフォードのラジオのつまみをいじっている。)

She began to see things in slow motion, some curious trick of the mind. His turn came, and…slowly…slowly…he moved Harry into the intersection—She could visualized his long legs working the clutch and accelerator and the muscles in his right forearm flexing as he shifted gears—curling left now onto 92 toward Council Bluffs, the Black Hills, and the Northwest…slowly…slowly…the old pickup came around…so slowly it came around through the intersection, putting its nose to the west.

(彼女はスローモーションの出来事を見ているような奇妙な心理になっていた。彼の左折が始まった……ゆっくり……ゆっくり……彼のトラックは交差点を左折している—彼の長い足がクラッチを踏み、アクセルを踏むのが見えるようだった。彼の右腕がギアをシフトする、その腕の筋肉まで見えるようだった—左折し終わると92号を北西方向のカウンシル・ブラフ、ブラックヒル方面へ向かう。……ゆっくり、……ゆっくりと……古いトラックが交差点をまわる。トラックはさらにゆっくりと方向を西に向けた。)

Squinting through tears and rain and fog, she could barely make out the faded red paint on the door "Kincaid Photography—Bellingham, Washington."

He had lowered his window to help him get through the bad visibility as he turned. He made the corner, and she could see his hair blowing as he began to accelerate down 92, heading west, rolling up the window as he drove.

(涙と雨と霧に曇った目で、彼女はトラックのドアの色あせた赤い文字“キンケイド写真—ベリンガム、ワシントン”を見た。左折の時ロバートは窓を開けて、視野が良く見えるようにしていた。その窓から髪がなびくのが見えた。92号に入って西に方向をとると、ロバートは窓を閉めた。)

"Oh, Christ—oh, Jesus Christ Almighty…no!"

The words were inside of her. "I was wrong, Robert, I was wrong to stay...but I can't go...Let me tell you again...why I should go"

And she heard his voice coming back down the highway. "In a universe of ambiguity, this kind of certainty comes only once, and never again, no matter how many lifetimes you live."

（“ああ神様、……ああ全知全能の神様、……嫌だ”心の中でひとり言葉を言っていた。“私は間違っているのかな、ロバート。私が残ることは間違っているのかな……でも私はあなたと一緒にいけない……もう一度言わせて……どうして私はいけないのだろう……もう一度言って、……どうして私はあなたと一緒に行くべきだったのか”

彼女はロバートの声が高速道路から戻ってきたように思った。“宇宙がもう一つあったとしても、この気持は確かだ。たった一度、これっきりない。二度とない。何回人生をやり直しても、もう二度とない。”）

"Good-bye, Robert Kincaid" She whispered, and began to cry, openly. Richard looked over at her. "What's wrong, Frannie? Will you please tell me what's wrong with you?"

"Richard, I just need some time to myself. I'll be all right in a few minutes."

（“さようなら、ロバート・キンケイド”とつぶやいて、大声で泣きだした。夫のリチャードが振り向いて“どうした？ フラニー？ どうしたんだ？ 話してみて！” “リチャード、ちょっとね。私自身のこと。大丈夫よ。すぐ直るから。”）

この別れの後、2人はお互いに一生手紙も電話もしない。ロバートが先に亡くなって、遺品のカメラがフランチェスカにとどけられ、ロバートの遺志によって、その灰が思い出のマディソン郡の橋にまかれる。十数年たってフランチェスカが亡くなった後で、子供に残した遺書で、自分の灰も、マディソン郡の橋にまいてくれという。この別れの後、夫と子供のために、自分の全てを尽くしたという確信のもとに。

さて、この例は意識の種類を示している。フランチェスカが見ているトラックは、交差点を左折して西に向かう。フランチェスカと夫のトラックは北へ直進する。perspective consciousness（認知する意識）としては、交差点を左折する恋人の車を見ているだけである。全く同時に introspective consciousness（内面の意識）が別れの辛さを実感している。恋人の車は、実時間を離れて、きわめてゆっくりと左折する。恋人が、クラッチ、アクセルを操作する足や、ギアをシフトする腕が幻覚で見える。

恋人の車が西に走り去ると、涙が湧いてくる。会話が回想される。そして声を出して泣く。夫がその理由を尋ねる。勿論、理由なんか言えない。この時の内面の意識は、検閲されている。フランチェスカは子供と夫のため

に、一生検閲する。言葉としても行為としても、外には出てこない。恋人との一週間の出来事が、もしなかったら自分の人生は違ったものになっていたかもしれないと遺書に書く。家族とともに農家で暮らす自分と、もう一人の自分自身があったのが、円満な家庭を一生続けられた理由だと回顧する。この物語の核心になっている二人の意識は、神的な意識である。潜在的な人格である。ユングがもし生きていたら、この物語はユングの理論のモデルケースとして、最適だと言っただろう。つまり(1)意識の中には、いくつかの人格があって、顕在化したがつている。(2)意識の中心には、神的なものがあって種々の人格を制御している。ロバートは独身の50代のフリーの地理写真家であり、フランチェスカは40代の元教師の農家の主婦である。ロバートはフランチェスカと会った後、貞節である。

## V. 考 察

夢の意義は現在もよくわかっていない。フロイト<sup>1)</sup>は性的な意義を重視して夢を分析した。ユング<sup>2)</sup>は性的な面だけでは夢の意義を説明できないと考えて、人格に隠れた満たされぬ願望を導入した。筆者ら<sup>3)</sup>は夢分析の対象となる潜在意識を正確に把握することが困難であると考えて、思考プロセスによって夢分析を試みた。夢の中で人物、時間、場所が変わる現象はフロイトが夢の検閲として定義した。このような夢の検閲は、夢の編集をもたらすので現実離れた夢の原因となる<sup>3)</sup>。

本項では、夢の構成を分析するために、独自の方法を適用した。すなわち、夢の材料となりうるような過去の出来事を対象にして、それがどのように回想されるかを検討した。その結果、過去の出来事を回想する際に、過去の意識が、現在の意識の中に再構成されていることがわかった。このことから、種々の意識を構成するプロセスが存在することが推定される。意識が構成されるプロセスは、夢が構成されるプロセスと近似していることをいくつかの実例によって示した。

また本項では、予知夢と幻覚の例を示した。予知夢と幻覚は、いずれもその材料となるような過去の映像がある。夢のカテゴリー<sup>4)</sup>の中でも、予知要素は重要であるが、現実の意識の中でも状況の推移を予知することは重要である。予知的な意識もまた、意識の一種であるから、上記のプロセスで構成されるものである。幻覚の場合は、関連ニューロンの異常が原因と考えられる<sup>5)</sup>。しかし予知夢と幻覚は近似的な現象なので、今後さらに検討したい。

## VI. 参考文献

- 1) S.フロイト, 懸田克躬, 高橋義孝訳(1989)夢の太古的性格と幼児性. フロイト著作集 I, 人文書院, pp163-170
- 2) C. G. Jung (1965) Memories, dreams, reflections, translated and edited by A. Jaffe, Vintage Books

Edition

- |  |  |
|--|--|
| 3) C. Burnett (1986) A memoir one more time, Avon publishers | try, A mandarin paperback                |
| 4) R. J. Wallen (1993) The bridges of madison coun-          | 5) 長崎紘明 (1993) 夢分析序論. 山梨医大紀要, 10 : 1 - 6 |
|  | 6) 長崎紘明 (1994) 夢の読み方. 化学, 49 : 33-35     |

**Abstract**

**English dream and memory  
—in the cases of Carol Burnett and Robert Wallen—**

Hiroaki NAGASAKI

S. Freud showed a significance of sexuality in his original dream analysis. Sexual consciousness had been described in the dream story through dream censorship. Nevertheless C. Yung thought the sexuality inadequate for the explanation of significance of dream. He introduced unsatisfied desires in human nature which are materials to construct consciousness, especially in the center of consciousness.

In this report we applied the original method to explain the dream materials. We introduced memory analysis how the facts of past which are dream materials reconstruct the present consciousness, showing several cases in "A memoir one more time" by Carol Burnet and "The bridge of Madison" by Robert Wallen.

---

Department of physiology II